

在外研修報告

—オーストラリアの史跡整備—

1987年9月20日より11月22日まで約2ヶ月にわたり、文部省の在外研修でオーストラリア、ニュージーランドを訪れた。オーストラリアは2億年前の失なわれた時代の自然と、2～3万年前の石器時代、狩猟生活を中心としたアボリジニーの古い文化を有する国であると同時に、1989年に建国200年という新しい国でもある。この古い自然・文化と新しい文化の調和、保存と活用する方法を知るために遺跡、国立公園、博物館などを訪問した。

アボリジニーの遺跡としては宗教的な場や、壁画などのRock Art、石組、住居跡、貝塚、石切場、カヌーや盾を作った木など多くの遺跡がある。オーストラリアは広大な国のため、これらの遺跡がまだ開発にさらされることもなく、フェンスを廻らして遺跡の位置を明示したり、遺跡が荒されないように土で被覆し、喬木・灌木・地被類で養生したり、草刈りなどの日常管理をするなど現状維持の凍結保存の例が多いようである。

オーストラリアの北部・中部ではアボリジニーが現在生活している場が許可なくては立ち入り禁止になっている所もある一方、アボリジニーの文化を理解させるために部落を見学して狩猟・食生活・作業などの生活を体験する観光ツアーも組まれている。

新しい文化としては、キャプテン・クックがオーストラリア大陸の東南海岸を発見し、上陸した1770年以来、英国王の領土と宣言した開拓時代、流刑植民地時代、1850年のゴールドラッシュ時代の史跡などがある。史跡の整備の方法としてはオーストラリア初期の開拓時代の町を再現する例が多く見られる。完全に建物・家具調度類の移築・復原、往時の植生復原するだけでなく開拓期の生活を体験させる例がオールド・シドニータウン、バイオニアワールド（パース）などに見られる。オーストラリア大陸最初の白人の居住区であるシドニーのロックス地区では、近年の開発で一部壊されたが、ジョージア式ビクトリア調の家並がロックス地区復興再建委員会により復興され、歴史的建造物として管理され、パブ・レストラン、みやげもの店、博物館などとして活用されている。ホバートのBattery Pointでも同様の保存がみられる。

ゴールドラッシュ時代の史跡ではArtung Historical Reserve（アリス・スプリング）、Bendigo（メルボルン）などに見られ、採掘現場の見学の便宜を図る他、町が修復整備されている。流刑の史跡としてはセント・ヘレナ島（ブリスベン）、ポート・アーサー（ホバート）などで、監獄や監督官の建物跡などを、歴史条件・発掘・気象・景観・生物などの基礎調査をもとに修復整備が図られている。セント・ヘレナ島では歴史的な国立公園としての管理運営が、ポート・アーサーでは町に入る所で入場料を徴収する町ぐるみの管理運営が図られている。

新しい文化にもかかわらず独特の自然風土の中で、自然環境を生かしながら史跡の保存整備が行われている。特に史跡の中で往時の生活体験をさせることや、現在の施設として利用するなど活用面において参考にする所が多く見られた。（田中哲雄）

—古代ギリシャ・ローマの都市遺跡—

1988年3月3日から5月26日の間、文部省在外研修費により、ギリシャ、イタリア、トルコの古代都市遺跡を実地見学してまわった。目的は、ヨーロッパ古代の都市変遷を、立地条件、規模、形態、構造、景観などから把握し、日本の古代都市と比較研究することにある。

訪れた遺跡は、30ヵ所ほどである。紀元前30c～12c頃のクレタ島の遺跡は、低い丘や丘陵の中腹に宮殿や町が立地し、城壁はない。宮殿も、木の梁と切り石のブロックとを組み合わせたビルディング風の建物で、部屋は複雑に入り組む。アクロポリスもアゴラもない。

ミケーネは、紀元前13c～11c頃のクレタに続く時代の遺跡である。王宮は、小高い丘の上に築かれ、高い城壁が囲む。クレタ形建築の継承とアクロポリス形城壁とが特徴である。

紀元前6c～5c頃のアテネやコリントスでは、アクロポリスに宮殿はなくなり、神殿だけが残っている。国の中心は、アクロポリスの下に広がるアゴラに移り、ここには、市場、官庁、泉水、劇場、神殿など、政治、文化、娯楽にいたるすべての機能が集まっている。

ギリシャ最盛期の植民都市であるトルコのミレトスやイタリアのパエストゥムなどでは方格地割り都市の実際に触れることが出来た。中国や日本のようには厳密な方格をとらないこと、都市規模も道路幅も小さいこと、外郭が不整形であることなどかなりの相違がある。しかしかなり早い段階で方格地割りが出現したことは注目される。また、これまで常識であった城壁が、当初から存在したかどうか、アテネなどでも問題になってきていることがわかった。

古代ローマ時代の遺跡は、オスティア、ポンペイなどを訪れた。ギリシャよりもはるかに大きな都市となり、アゴラにあたるフォロが中心の都市である。首都ローマでは、ギリシャ同様ここに国家機構の全てが集まっているが、ポンペイなどの地方都市でも、フォロが中心の形態をとっている。アクロポリスにあたるものはなく、建物もレンガづくりである。

ポンペイでは、考古学監督所のエンゾー＝マトローネ氏に、研究施設と、発掘中の現場を案内してもらった。ちょうど二階の床まで掘りおわり、一階の屋根が出はじめたところだった。焼けた床が炭の塊となって生々しく残っていたり、掘り出されたばかりの壁のフレスコ画がきわめて鮮やかな色調であったり、遺存状況の良さには驚かされた。

今研修は、遺跡の実地見学が中心となったが、アジアの影響を受けたクレタ島から古代ローマ時代までの都市変遷を系統だてて実見出来たことと、遺跡の保存と活用の実際を見ることが出来たことは大きな収穫であった。（田辺征夫）

ポンペイ遺跡、発掘したばかりの壁画。下は火山灰の堆積